

## 傍正中切開による子牛の尿膜管摘出手術

阪神基幹家畜診療所

○笹倉春美 芝野健一 黒岩武信 泉 弘樹  
井上雅介 山崎 肇 佐野 努 嵐 泰弘

子牛の尿膜管遺残は、処置の遅延により上行性の感染が進行する可能性があるため、早期摘出が必要とされる。尿膜管遺残は超音波画像検査(エコー検査)により診断が可能であり、尿膜管の癒着や走行、尿膜管内の膿様物の有無などの確認が重要であることを一昨年報告した。成書では、尿膜管の摘出手術は正中切開で実施するとされている。しかし尿膜管の正中腹壁への癒着が多いことや、術野が広範囲のため、フィールドでは術前術後の管理が困難である。今回、尿膜管摘出手術を傍正中切開で行い、良好な結果が得られたので報告する。

### 材料および方法

2011年5月から2013年8月の期間で、エコー検査により尿膜管遺残と診断した子牛7頭を用いた(症例1～7)。

- ① 症例1: 126日齢。手術は子牛を2%キシラジン鎮静下にて仰臥位にし、臍部から膀胱と尿膜管の連絡部位が目視できるまで正中を切開した。尿膜管と膀胱の連絡部位を膀胱側で切除し、膀胱の一部、尿膜管および臍部を摘出した。
- ② 症例2～7: 36～139日齢。子牛を2%キシラジン鎮静下にて仰臥位にし、乳頭前方の傍正中を尿膜管と膀胱の連絡部位が目視できるまで切開した。膀胱と尿膜管の連絡部位を膀胱側で切除し、膀胱の一部および尿膜管を摘出した。臍部は膿瘍を認めた症例では臍周囲を切開し、臍部を摘出した。臍部に膿瘍を認めなかった症例は尿膜管のみを摘出した。尿膜管の腹壁や大網への癒着を認めた症例では、尿膜管を鈍性剥離した。

### 結果

- ① 症例1では、尿膜管の腹壁への癒着は認めなかった。手術経過は良好であったが、発育不良のため淘汰した。
- ② 症例2, 3, 4, 6, 7では正中付近に尿膜管の癒着を認めた。症例5では尿膜管の腹壁への癒着はなかった。全頭手術経過は良好であった。症例2, 4, 5, 6は市場に出荷され、症例7は現在育成中である。症例3は発育不良のため淘汰した。

### まとめ

正中切開での尿膜管摘出手術は、臍部から膀胱直上まで広範囲の開腹を必要とする。傍正中切開では、乳頭前方を切開することで創口から膀胱までが近いため、尿膜管との連絡部位を目視しやすいことや、尿膜管の癒着部位を避けた切開が可能であった。さらに雄では陰茎を避けることが容易であった。今後の課題として膿瘍部分の適切な処置を検討する必要があると考えられた。